

調査・研修報告書（会派個人用）

会派名：結

報告者：近藤 久子

実施場所：Zoomによる参加	実施日：令和6年7月29・30日
<p>■ 目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状 など）</p> <p>令和6年度 第2回 市町村長等・議会議員特別セミナー（オンライン）1日目</p> <p>I 7月29日 曖昧な弱者とその敵意～社会分断の新たな構造～ 成蹊大学文学部現代社会学科 教授 伊藤 昌亮（まさあき）氏</p> <p>II 7月29日 ともに生きる 未来につなぐ みんなでつくる「健康しが2.0」 滋賀県知事 三日月 大造 氏</p>	
<p>■ 参考とすべき事項</p> <p>I の講義</p> <p>1, 「弱者叩き」と「弱者争い」（差別がいつまでも無くならない） ヘイトスピーチ→在日・アイヌ・沖縄・高齢者・障害者・女性・LGBTQ・ホームレス <b>「自分だってつらいのに」「なぜあいつらばかり助けられるのか」</b></p> <p>2, 「曖昧な弱者」が「明白な弱者」に敵意を抱く ・「誰が弱者なのか」の問いに「自分こそが弱者だ」という答え：全ての人が弱者化する時代</p> <p>3, 「曖昧な弱者」の発生 ・自民党による、日本型「分配の政治」の劣化。 ・中心部における排除（これまで企業に助けられてきた人達が排除されている） ロスジェネ男性：就職氷河期（非正規雇用）一生そのまま。 弱者男性・KKO（キモくて金のないオッサン）＝関係型弱者：低学歴独身中年男性 この説明の際講師は「大量に発生している」との表現をされた。 「明白な弱者（女性・高齢者・シングルマザー・外国人等）」への対応（分配・保障・人権政策）は、疎かにしてはならない。助け方が違う。</p>	
<p>II の講義</p> <p>1, 三日月知事の経歴→JR 西日本入社、8年後退社後松下政経塾に入塾、衆議院議員4期 連続当選、2014年滋賀県知事就任今年7月に知事就任10年目。 <b>基本姿勢→対話、共感、共創。徹底した現場主義(見て、聴いて、知る)</b></p> <p>2, 面積・人口とも日本の100分の一。マザーレーク（琵琶湖）は水源として1,450万人の生活と産業を支える。日本一のモノづくりの県（日本コカコーラ、P&amp;G, ブリジストン、コクヨ工業他</p> <p>3, みんなでつくる未来と幸せが続く滋賀。目指す2030年の姿（経済、社会、環境のバランスが取れた持続可能な滋賀。この実現に向けたチャレンジのテーマ。 ●「子ども・子ども・子ども」と「ひとづくり」 ●「子どものために、子どもとともにつくる県政」</p>	

- ・2023年4月「滋賀県子ども政策推進本部」設置
- ・2024年4月「子ども若者部」新設

●「人の居場所」と「公園」

- ・適度な疎の空間が広がる滋賀 疎は可能性

●Mother Lake Goals 琵琶湖版のSDGs の策定

- ・琵琶湖に関わる人の思いを広く集めて策定（2021年）
- ・湖に浮かぶ学校「**学習船うみのこ**」滋賀県全ての少学5年生が、他校の児童と1泊2日の研修の実施。

●まちづくりと地域交通 **近江鉄道線の再生 公有民営方式へ(上下分離)**

- ・県内19市町の内5市と5町を通る。まとまらない自治体の意見。県と沿線市町が2分の1出し。高齢者は1日500円乗り放題。子ども100円乗り放題。
- ・滋賀地域交通のビジョンづくり、財源として「**交通税**」の検討。

●県北部地域の振興

- ・課題が先行する地域（人口減少、高齢化に伴う担い手不足等）解決手法を見つければ他の地域のモデルとなる。
- ・**ジェンダー平等ミーティングの実施**
- ・「娘の意見を聞かずしてジェンダーの視点でまちの未来は語れない 祭りで男は飲み食べるだけ、女は作って片づけて。娘はこんな町での将来は語れないと言った」

■ 提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

**Iの講義**→「明白な弱者」と「曖昧な弱者」は日本型福祉社会・日本型差別構造等の諸施策の綻びであり、兎に角、非正規雇用の問題は大きいと講師の弁である。日々の暮らしの中で感じる不満や不安は、それぞれの世代を越えている。分配・保障・人権対策等、国はしっかりと骨組みをつくるべきである。行政としては、このような現実がある事を敏感な感覚で受け止め、市民に寄り添える施策に結び付けたい。

**IIの講義**→沖縄県に次いで、人口流出の少ない県であることが、知事の明快なご講演から即理解できた。羨ましくもあり、これまで全く知らなかった事を悔やんだ。

2100年頃の未来を展望するために「**しが2100未来研究会**」を本年立ち上げ。

「環境と経済が調和し、幸せが続く滋賀」に転換していくための物差しと共創の形を見出す研究会。先月開催の初回のテーマは「人口減少日本でおこること、戦略的に縮むために」我々が常に口にし、市民の皆さんからも常に質問される人口減少対策。

現在の取り組みを否定するわけではないが、人口減の数字が先行し過ぎているのではないか。定住、移住にしてもパイの取り合いに思える。戦略的に縮むの表現に感動。

トップダウン形式は決して良い意味で使用されることではないが、知事の思いは誰にでも分かり易いひらがなの多い表現で県民に伝わっている。「ひとりひとりを大切に」「これまでの歩みを大切にしながら、変わっていく社会にどのように臨むか」庄原市においても、対話、共感、共創を基本に未来に希望の持てる町づくりを。

令和6年8月5日

調査・研修報告書（会派個人用）

会派名：結

報告者：近藤久子

実施場所：Zoomによる参加	実施日：令和6年7月29・30日
<p>■ 目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状 など）</p> <p>令和6年度 第2回 市町村長等・議会議員特別セミナー（オンライン）2日目</p> <p>I 7月30日 「労働供給制約社会」への処方箋 リクルートワークス研究所 主任研究員 古屋 星斗 氏</p> <p>II 7月30日 こどもたちの生きるを育む～「COLOMAGA プロジェクト」の活動の軌跡～ COROMAGA プロジェクト本部事務局長/伊豆市版 KURURA 事務局 高橋いづみ 氏</p>	
<p>■ 参考とすべき事項</p> <p>I の講義</p> <p>1, 「働き手不足 1100 万人」の衝撃 日本社会に何が起きているのか。 「介護職 40 年度 4200 人不足」「九州・沖縄の建設・運輸、人手不足深刻」 「14 万人不足の深刻物流危機」「観光・飲食…人手取り合い 企業 5 割正社員不足」 「老朽化や技術者不足で満身創痍の水道インフラ」「教員不足・・・赴任拒否の存在」 「整備士不足、疲弊する現場・修理は 1 か月後」「6 割の施設で薬剤師採用難」 「防衛力抜本強化の中自衛官が足りない」「警察志望者の減少が顕著。大阪、鹿児島 県では 5 年間で 3 割の減」 「国の地方創生施策は誰かが勝てばどこかの若者が減少している。人の取り合いでは解決できない」 「日本は高齢人口の増加と現役人口の急減が同時に進む局面にある。」</p> <p>2, 絶望的なほど大きな労働の需要・供給のギャップを埋めるために</p> <p>①徹底した自動化・機械化・ワーキッシュアクトの導入により 10 年の猶予を作る。 ②「居住地改革」「税制など働き手を一層豊かにするインセンティブ設計」「外国人など全ての人に魅力的な国づくり」「高速度の交通インフラ構築」「異次元の少子化対策（労働市場には 20 年後、全く追いつかない）」</p> <p>3, 地域企業はどう変わるか</p> <p>①他の職場で通用するほど辞める。キャリア自立になるほど辞める。育てる程辞める。育成→定着の矛盾関係。ハイパーメンバーシップ型組織（多くの関係社員が穏やかなメンバーシップを感じ、関係性を保持する組織）の構築 ②多様な人材の活用を推進（採用方針を維新） 従来の採用フロー 書類選考→1 次面接→2 次面接→合否→採用 今後の採用フロー 書類選考→1 次面接→兼業（3～6 か月）→転職可否→採用</p>	

## II の講義

- 1, **今の人材育成が 5 年後 10 年後の地域の未来を創る**
- 2, COLOMAGA プロジェクトとは、子どもたち（小学校 4 年生から中学 3 年生）がつくるローカルマガジン。2013 年静岡県伊豆市でスタート。冊子名は「KURURA」
- 3, 地域の課題として若年層の人口流出（地域への愛着が薄い事が大きな要因）
- 4, 1 号の完成発表では「身近に良いところが沢山あった」「近くに住んでいても知らなかった」「大人の人達が優しく素敵の人だった」と子供たちは感想を述べた。数年経過後、地域の魅力を再認識。地域で暮らす意識の向上等の変化が現れた。
- 5, この活動には「生きる力」を育むプログラムがある。
  - ・シビックプライドの醸成。自分が感じたものをアウトプットして伝える力。
  - ・自分が社会の役に立つ（自己肯定感）。キャリア教育（仕事に対するポジティブな感情）。サードプレイスの創出。何かを生み出すセンスとパワー。
- 6, 10 年続いた効果として、現在 1 都 1 府 5 県 18 地域が参加（広島市も）

## ■ 提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

**I の講座**→あまりにも漠然とした捉え方を我々はしていないだろうか。例えば、介護職の方々の人数と、これから増大することが確実な要介護者間のバランスはいつまで保たれるのか。入居施設はあるのか。健康長寿を目指すことは一つの方策に過ぎないのではないか。一人暮らしの高齢者の増加は、在宅介護が困難な状況がある。家族構成の変化の中で、どのような覚悟を我々は持たなければならないのだろうか。覚悟自体辛い生活の入り口感がある。

健康不安、生活苦の不安、コミュニケーション不足の不安（頼れる人がいない）

高齢者向けの集いの場や健康体操の実施はあっても、年齢を重ねる毎にお一人お一人の生活が不安を増していく。

更に追い打ちをかける働き手不足による様々な不便さは、「こんなはずではなかった」と、責任をどこかに押し付けても解決はしない。市として最も危惧される分野から、それこそ滋賀県のように、変わっていく社会にどのように臨むか、課を超えた議論が必要ではないか。

**II の講座**→伊豆市発祥の COLOMAGA は、地域の関係人口創出にも一役買い、高校生はリピーターメンバーとしてテーマや取材先の検討、講座の運営に携わっている。10 年続いた効果は大学生コネクトチームの発足に繋がり、初代子ども編集部が社会人・大学生となり地元に戻って就職やまちづくりの勉強をしている。

こうした成功の道程には、そこに住む大人が地域を愛することを、本気で子どもたちに見せる事（伝える事）があり、本職のサポート体制の充実があつての成功例だと思う。

庄原市の子ども達は「ふるさとが好き」と言ってくれるか、その問いかけの前に大人たちが「庄原が好き、ふるさとが好き」と言えるか。特別な取り組みをしなくても。